

また、同誌「我友の声」の欄に次のような感想文が掲載されており、意義深い展覧会であったことが推察される。

△本校の會議室で開かれた故狩野芳崖翁の展覧會は、翁の一生の面目を知ることを得ると同時に、故翁が如何にその藝術のために苦心慘憺せられたるかを見ることが出来た、彼の學校所藏の悲母觀音の一幅を見て、其技術と苦心とに驚くよりも、翁の一生の苦心はいかばかりであつたであらうか、翁は純狩野の人であつたのは今更らふ迄もなく、壯年の作は此間の真相を傳へて居るが、晩年に至りては一轉化をして、作風の變化と共に、思想の渾成融合の跡は、歴々たるものがある。藝術に遊ぶものは、かくの如き勉勵と苦心とがなくてはならぬものであるといふことは、故翁が生きた教訓を後生に遺したものであるかのやうに感じた（感激子）

なお、二十三回忌を紀念して翌四十四年二月、岡倉秋水、本多天城編『狩野芳崖遺墨帖』が西東書房より發行された。

### ⑤ 加納夏雄銅像除幕式

明治四十三年十二月四日、本校彫金科の最初の教授であつた故加納夏雄の銅像（原型米原雲海）が構内に建設された。構内銅像のさきがけであつた。除幕式の模様は『東京美術學校校友會月報』第九卷第三号に次のように記されている。

○故加納翁銅像除幕式 東京美術學校中庭に建設せられたる帝室技藝員彫金家故加納夏雄翁の銅像除幕式は、豫定の如く十二月四日午前十一時より舉行せられ、來會者は美術家知己其他二百餘名にして建設委員總代海野勝珉氏の報告に次で、正木〔直彦〕美術學校長は翁の斯界に對する功績及び當局を代表して銅像を受領する旨を述べたる後、翁の令孫幸雄氏除幕を行へば、東京美術學校の舊時の制服正帽を着けたる翁の半身像は、宛然生けるが如く、一同拍手の裡に芽出度幕を除き、次で濱尾〔新〕帝大總長、柴田幸三郎、鹽田眞、美術學校生徒、故翁の最舊門下生なる益田友男諸氏の祝辭等ありて、午後一時式を終り、夫れより園遊會に移り、各種模擬店を開き、手品大神樂の餘興ありしが、中にも柴田氏は故翁が靈刀の跡を留めたる、同氏所有の金釜に自家醸造の銘酒を沸かして來賓に振舞ひ、尙校内の一室には同校所藏及び都下所在の同翁作品數百點を陳列して觀賞に供したり。

### ⑥ 日英博覽會

明治四十三年五月一日より同年十月末日まで、ロンドンで日英博覽會が開催された。出品に関しては両国の通商關係を主とし、文教の沿革、美術、諸制度にも及ぶという方針がとられ、我が国から多數の古美術品や新作品（第一回く第三回文展買上品等）が出品された。本校では正木直彦校長が同博覽會評議員、美術及び歴史に関する出品計画委員長を命ぜられ、また、大村西崖、岡田信一郎、久米桂一郎、岩村透、菅野真、関保之助らが出品準備に参画し、正木、久米、岩村、菅野、関らが渡英した。

本校はこの博覧会に積極的に出品している。本校の出品物のうち  
 文部省管轄のものは「自明治四十四年 博覧会 出品書類 庶務掛（明治四十四年  
 以前については書類が焼失したので正式記録が無い。）によると次のとお  
 りである。

本校各教室写真貼込額	一
同敷地建物図貼込額	一
同一覽冊子	一二〇〇
同生徒作品集	一
日本画科 額面 <small>（天平風俗 土佐山 水子守 武者）</small>	六
同 日本画画帖	二冊
彫刻科	
木彫白拍子	一
木彫天平美人	一
木彫琵琶ヲ弾スル人物 <small>（木彫 彩色）</small>	一
木彫観音坐像	一
同 堆朱雁来紅二曲屏風	半双
同 牙彫鳩置物	一
同 標本芝山象嵌群蝶模様手筈	一
同 貝甲標本 <small>（巻貝二個（楯図、蛸図） 手坂四枚）</small>	六種
同 図案額面	三
同 金工科	
銅製切嵌模様硯屏	一
同 四分一製鯉図香炉	一
同 銅製柿実香合	一
同 銅製切嵌杉図香合	一
同 銅製瓢水滴	一

鑄造科	鑄金細口花瓶	一
同	鑄金横広花瓶	一
同	鑄金蛇籠文鎮	一
漆工科	二枚折合作蒔絵屏風	半双
同	紫陽花図蒔絵硯箱	一
同	瀑布図蒔絵短冊箱	一
同	擬宝珠図蒔絵手箱	一
同	扇面散シ図蒔絵香盆	一
同	鯉図蒔絵硯箱	一
飾棚		二

また、『東京美術学校校友会月報』第八卷第六号所載「文庫彙報」によると、このほかに文庫収蔵品の中から雪村筆「柳鷺図屏風」をはじめとする古美術品二十六件、狩野芳崖筆「大鷲図」「牧童図」「不動図」、山脇信徳卒業制作「停車場の朝」、法隆寺中門模型、薬師寺東塔模型が出品された。さらに本校依嘱製作品の博覧会売店入口装飾用造花および仁王立像二体（日英博覧会事務局依嘱）、芝霊屋台徳院模型（高村光雲・古宇田実監督、山本瑞雲製作主任。東京市依嘱）、東京市模型（同上監督。同上依嘱）等の出品もあった。

なお、久米桂一郎は日英博覧会出品協合理事に就任したので本校を一年余り休職し、明治四十三年三月二十一日に出発して十二月までロンドンに滞在した。次いで十二月三日にはハンガリーのブダペストに赴き、国立美術博物館に於ける日本美術展覧会の事務処理に携わり、翌四十四年一月二十一日にはブダペストを発って、「希臘

国パトラス、オリムピア、レフシス、アテンス等ヲ經テ埃及国アレキサンドリヤニ渡リカイロ、サッカラ、ルクソール、アスワン、フィン等ノ諸地ヲ回歴 各地ニ於ケル古代遺跡ヲ研究」〔東京美術学校旧職員履歴書〕して三月二十三日に帰国した。

### ⑦ コスモス会展覧会、藤田嗣治

明治四十三年四月三日から一週間、赤坂溜池三會堂でコスモス會が第二回展を開き、卒業制作と在学五年間の作品を展示した。コスモス會は小絲源太郎の回想記(43頁)にも登場したが、これは明治四十三年西洋画科卒業の田中良、田辺至、長谷川昇、岡本一平、近藤浩一路、藤田嗣治その他が作った会で、何かと目立つ行動をするこゝとで校内では有名だった。このクラスは俊才が多く、その卒業制作は「近年比類なき好成绩」〔美術新報〕第九卷第四号。明治四十三年二月一日)と評された。山脇信徳、池部鈞、大谷浩、九里四郎らも同じクラスである。

このコスモス會に因んで藤田嗣治自ら語る所により、その学生時代を垣間見てみよう。

〔フランス留学を夢見て暁星の夜学でフランス語を習っていた藤田に対して森鷗外は助言して〕さうして森先生の説では、それは佛蘭西に行くのも宜いが何しろ日本の畫界と云ふものは非常にごた／＼が多いから、矢張り美術學校に入つて先生方と近付きなつたり、色々の繪描の人と知合ひになつた方が宜い、今後日本に五年も居るのは惜しいが、五年間は學校に入つて居れ、何にも宜い成績を得なくとも宜い、遊んで居つても構はないから學校に入

れと云ふことでありましたから、美術學校に入りましたが、森先生のお許しがあつたのを幸に學校では非常に怠けました。其時分丁度同級には岡本一平君、近藤浩一路君と色々英雄が居りました。それから長谷川〔昇〕君や何かと始終遊び廻つて中々學校の方はやりませぬで、どうも先生には始終叱られたりして成績が非常に悪かつた、三十人位居りましたが卒業の時は丁度十六番目で卒業したと思つて居ります。卒業の間に黒田〔清輝〕さんが私の卒業製作の繪を皆の前に出して悪い例として説明されました。それで私はどうも色々自分がやつて見たいことも先生の通りに従はなければならぬので中々苦しくて、一日も早く佛蘭西へ行きたいと思ひましたが、何分學校を出てから直ぐと云ふ譯にも行きませぬので、三年ばかりぶら／＼して居りまして、其間三年續いて其時分の文展に……今の帝展に出しましたが、三度とも見事に落選しました。それでも私は平氣でしたが、私の家の奴が心配して是では見込がないから、まあ佛蘭西へ行つて来い、さうしたらどうにかなるだらうから行つたら宜いだらうと云ふので行きましたが、丁度佛蘭西へ行きますと和田三造君が居りました。それから梅原〔龍三郎〕君、長谷川昇君などが皆居りまして、あちらでは其時分セザンヌとかルノアールとか、長谷川君はバンドンゲンと云ふやうな新しいことをやつて居りました。

〔巴里に於ける画家の生活〕藤田嗣治。『東京美術学校校友会月報』第二十八卷第五号。昭和四年十一月。校友会文芸部主催講演會講演録〕